

220
2022.1.11

学会ニュース

The Academic Society of Tokyo Woman's Christian University



東京女子大学

〈学生研究奨励費成果報告〉

本学図書館所蔵『源氏百人一首』の翻刻と調査.....	2
小学校における英語教育実態の把握と英語教育実践.....	3
地域日本語活動を通じて学ぶ多文化共生.....	4
— 振り返りの考察から —	

201A1 本学図書館所蔵『源氏百人一首』の翻刻と調査

古典文学研究会は、「近世期において『源氏物語』がどのように享受されていたのか」、「『源氏物語』の和歌がどのように解釈されていたのか」、「版本においてどのような文字が使用されているのか」の三つの疑問点を明らかにするため、本学図書館所蔵の『源氏百人一首』を研究しております。

『源氏百人一首』は、黒沢翁満により執筆され、天保10(1839)年に刊行された『源氏物語』の和歌の解説書です。著者の黒沢翁満は江戸後期の国学者で、本居宣長の門弟です。本作の構成は、『源氏物語』の登場人物が詠んだ和歌を一首ずつ選出し、上段に人物と和歌の解説、下段に人物名と和歌を記すというものです。本作は「百人一首」と題するものの、取り上げられている人物は123人いるという不思議な書です。また、本作には、光源氏や紫上は勿論、中川の女などあまり有名でない人物も取り上げられており、著者の黒沢翁満が『源氏物語』の「マニア」であったことがうかがえます。

今年度の古典文学研究会は、昨年度から引き続き、本学図書館所蔵『源氏百人一首』の翻刻を行いました。コロナウイルスの影響により、大学に集まり調査をすることはできませんでしたが、各自担当箇所を翻刻し、メールで添削し合うことで、活動を続けることができました。

今年度の研究の結果、本作には、和歌において同じ文字が連続する場合は違う字母の文字を使用するという特徴があることが分かりました。また、解説文において和歌を引用する際には「○」の記号を使用するという特徴も見られました。解説文にはその和歌を詠んだ人物についての説明と和歌の解説に加え、和歌が詠まれた場面についての言及もされておりました。簡潔に分かりやすく『源氏物語』について説明されており、この部分を読み解くことで『源氏物語』の新たな読みにつながるのではないかと考えております。

研究を進めることで明らかになることがある一方、新たな疑問もいくつか現れました。

本作は桐壺帝から始まり、ほぼ『源氏物語』の巻の順に登場人物の歌が取り上げられていますが、その配列に著者の意図がうかがえ、『源氏物語』を享受する独自の息遣いのようなものが感じられます。今回翻刻したなか

に紫上が登場しますが(29丁オ)、その直前に紫上を育てた北山尼の歌(27丁オ)とそれに対する少納言乳母の返し(27丁ウ)、さらに北山尼の兄である北山僧都の歌(28丁オ)へと展開してゆきます。このことから、和歌の掲載順は物語の展開に合わせながらも、そこに著者の思いが反映されていると考えられます。また、発表会の際、本作の和歌の選出基準が藤原定家の『小倉百人一首』や『物語二百番歌合』の影響を受けたのではないかとご指摘をいただきました。来年度はこのことを確かめるため、和歌の掲載順と選出基準についての調査をしたいと考えております。

解説文では、北山尼の解説に検討すべき点が見つかりました。この解説には文法の説明も含まれており、「おひたゝむありかもしらぬ若草をおくらす露ぞきえんそらなき」という和歌に対し、「おくらすはおくらかす也」と記されておりました。「おくらす」は「後に残す」の意で『古今和歌集』の離別歌(巻8・367)などにも見られます。このことから、『源氏百人一首』が成立した当時において、「おくらかす」が通常の表現として存在したのか、また、「おくらす」は歌語であったのかという疑問が湧きました。このことに関し、今後調査していきたいと考えております。

人物の呼称について、「藤壺中宮」を「薄雲女院」と称していること、また、巻の名称で、通常使われる「賢木の巻」を「榊の巻」と表記していることも、とても興味深く感じました。

本作の挿絵では、『源氏物語』で「赤鼻」が特徴的な醜女として描かれる末摘花が、紫上のような美女と似た姿で描かれています。このことから、本作の絵師に『源氏物語』の知識はなく、名前の雰囲気だけで描いたのではないかと考えております。

来年度の活動では、以上の新たに生まれた疑問点を含め、当初の目的である「近世期における『源氏物語』享受の在り方」「和歌の解釈」「版本における文字の調査」の解明も目指し、調査を進めていきます。

(文責：中田)

(代表：齋藤葵／飯田希栄 中島玉貴 中田紗良
工藤京子／

助言者：今井久代先生／光延真哉先生)

201A2

小学校における英語教育実態の把握と 英語教育実践

1. はじめに

我々東女 Cross は、東京女子大学の言語科学専攻と国際英語専攻の12名で活動をしている学生有志団体である。3年前に発足した東女 Cross の名前には、「地域と繋がる」という意味が込められている。昨年度までは、地域貢献活動として西荻窪にあるにしおぎ base で、地域の子どもたちを集めて英語の授業を開催したり、杉並区の小学校で英語の授業を行ったりして「英語の楽しさ」を小学生に伝えてきた。今年度は、コロナ禍の影響で対面授業を行うことができなかったため、英語を学べる動画を作成し杉並区教育委員会の公式 YouTube チャンネルで投稿していただいた。

2. 研究のきっかけ

研究のきっかけは、以下の4つである。

1. 対面授業ができない中で何か私たち大学生にできることはないかと考えた。
2. 東京女子大学のある杉並区で地域貢献活動を行いたいと考えた。
3. 英語学習を学校という学習の場だけでなく、大学生が小学生に英語を教える場を作りたいと考えた。
4. コロナ禍における小学校英語教育の実態の把握をしたかった。

3. 研究のスケジュール

1年間の研究スケジュールは以下の通りである。

通年	毎週のオンライン会議（動画の進捗やアイデア共有など）
5～7月	YouTube 動画第1弾作成（2つの小学校にも配布） 出来上がった動画のフィードバック
8～10月	YouTube 動画第2弾作成
12月	手作り福笑いとクロスワードパズルの作成・小学校へ配布
現在	YouTube 動画第3弾作成

4. 冊子づくりの目的

今回の活動報告の冊子を作成したいと考えている。以下の2点の理由からである。

1. より多くの学生と私たちが学んだことを共有したいと考えたため。
2. アフターコロナの時代において、我々の活動が何らかの役に立つかもしれないと考えたため。

5. 小学校英語教育の現状

2020年度より、小学校では中学年（3・4年生）で「外国語活動」、高学年（5・6年生）で「外国語科」が

必修化された。しかし、小学校英語教育の早期化開始となる3・4月が新型コロナウイルスの影響で休校となってしまう、実施できなかった単元があったり、スピーディーに授業を行わなければいけなくなったりしてしまった。実際に小学生と話をすると、外国語活動は回数が少なく、習ったことを次の授業まで覚えていなかったり、季節のイベントに合わせて授業を行っているため中学校への直接的に継続する授業ではなかったりしているのが現状だった。

また、文部科学省は、中学年は「聞くこと」「話すこと」、高学年は「読むこと」「書くこと」を導入するように示しているが、実際に「書く」作業を授業時間内に導入すると多くの時間を要するため、なかなか授業内でのフォローは難しいと感じた。

6. 実践した活動

6.1 YouTube 動画作成

3つのジャンルに分けて動画を作成した。

1つ目は、曜日や月・日付、教科などのテーマに分け動画である。小学生との会話の中で少し弱いと感じた単元や、実際に小学校で授業を行う予定だった際に実施予定だった単元を基にテーマ設定を行った。

2つ目は、世界の文化を取り上げた動画である。東女 Cross のメンバーには国際英語専攻の学生が多く所属しており、留学したことがある国や行くはずだった国の文化について取り上げた動画を作成した。

3つ目は、ハロウィンやクリスマスなどの季節の行事を取り上げた動画である。単語の練習のみならず、海外での季節の行事の過ごし方や、歴史についても触れて作成した。

6.2 福笑いとクロスワードの作成

動画のみならず、小学生に英語を使って楽しんでもらうことができないかと考え、クロスワードパズルとクリスマスバージョンの福笑いを作成した。クロスワードパズルは、どの学年でも楽しめるように難易度別に2種類作成をし、地域の小学校にメールで贈呈した。

7. 実践した活動から得られた成果

7.1 活動した学生の声

動画の作成スキルを身につけることができた。
様々な子がいることを想定してどんな子でも楽しく英語が学べるような動画を作成した。
子どもたちの反応を見ながら授業やアクティビティーを行うことの大切さを知ることができた。
自分の考えを動画に詰め込むことができるため、動画でしかできないこともあった。

7.2 杉並区教育委員会事務局の方々からの講評

学生の思いがよく伝わってくる動画でした。
子どもたちの英語への関心が引き出される作りになっていると思います。
スライドのデザインや動画の間の取り方など子どもが学びやすい工夫がされていると思います。

8. 今後の展望

今後の展望は、YouTube 動画第3弾のアップロードや授業のアクティビティーや練習プリントの提供など、先生方と一緒に授業を考える機会を作りたいと考えている。

(文責：吉田)

(代表：吉田早希／相田美祐 荒井里沙子 伊藤菜緒 鈴木沙帆 鈴木詩織 田村美悠 丹野杏音 戸塚愛 幕田優菜 松岡咲良／山口遥 助言者：鈴木栄先生)

2021A1

地域日本語活動を通じて学ぶ多文化共生 — 振り返りの考察から —

1 はじめに

現在、日本では在日外国人の数が増加している。昨今、日本に暮らす外国人との共生が重要視されるなかで、多文化共生に注目が集まっている。それに伴い、同じ日本社会で暮らす生活者として、在日外国人が日常生活で自分の意思などを伝えるための日本語の必要性も考えられている。このような状況から、地域日本語教育の現場にも大きな関心が集まっている。

本研究のメンバーは、東京都豊島区高田馬場で行われている VILLA EDUCATION CENTER が実施している日本語活動(以下、VEC 日本語活動)に参加している。VEC 日本語活動では、「やさしい日本語」で書かれたニュースについて、ミャンマー参加者とともに学び合い、ニュースに関連する内容について話し合う活動をしている。活動テーマは毎回異なるが、参加者全員が「対話」を通して学んでいる。そのため、VEC 日本語活動は、参加者全員にとっての学びの場であると言える。

本研究では、VEC 日本語活動は参加者にとってどのような役割を果たしているのかについて、毎回の活動後に行っている振り返りから考察をする。そして最後に、今後の多文化共生社会に求められる取り組みについての考えを述べる。

2 VEC 日本語活動の振り返り

VEC 日本語活動では、毎回必ず振り返りを行っている。活動を開始した 2014 年から 2021 年 9 月 26 日時点で計 307 回活動を続けてきて、その活動回数分と同様、307 回分の振り返りが Word ファイルとして保存してある。

振り返りは大きく分けて二つある。活動の最後に参加者全員で行う振り返りと、ファシリテーターが行う振り返りだ。前者は、参加者全員が活動の内容やテーマについての感想などを自由に発表する振り返りで、後者は、ファシリテーターが進行役としての反省点や準備段階で気を付けた点などを共有し合う振り返りである。

VEC 日本語活動では、本学の教員や現役日本語教師だけでなく、学部生や院生も積極的にファシリテーターを務めている。そのため、活動参加者の声に加えファシ

リテーターが行う振り返りから VEC 日本語活動の役割を考察することも、大切な分析観点となる。

3 振り返りの考察

VEC 日本語活動が果たしている役割について、以下の三つを挙げる。

一つ目は、ファシリテーターの自己成長を育む役割である。2021 年 6 月 20 日の活動時に、ファシリテーターの経験が少ない学部生から「活動全体の時間配分を考えるとできなかった」という振り返りがあり、それに対して教員が「今後の課題にするようにすればよい」とコメントをした。その日の活動内容を考慮し、時間配分に注意するという事は、非常に重要なことである。しかし、それは簡単なことではない。活動経験の長いファシリテーターも同様の反省をすることもある。そのため、ほかのファシリテーターもこの学部生の振り返りを聞いて、ともに学び、今後の活動に活かそうと意識するようになる。このように、その場で活動を振り返ることで、ファシリテーター全員が、個人の課題や反省を自分ごととして捉えることができるため、VEC 日本語活動はファシリテーターとしての自己成長にも繋がると考える。

二つ目は、相互理解・相互学習の役割である。2021 年 8 月 8 日の活動では、参加者の住んでいる地域のハザードマップを実際に見て避難場所などを確認し、活動を行う教室の近くにある AED の場所を確認しに行くという活動を行った。この時の振り返りでは、初参加の他大学の学生から「教室の近くにある AED の場所を確認して、AED の大切さを改めて知った。自分の近所の AED の場所を確認しようと思った」という振り返りがあり、ミャンマー参加者からも同様、「何気ないときに防災について学ぶことができてよかった」という振り返りがあった。初参加の他大学の学生の意識を変えることができ、ミャンマー参加者にとって良い学びの時間となったのは VEC 日本語活動はミャンマー参加者のみならず、活動に参加している全員が知識を得て学び合い、ともに理解を深めている、相互学習・相互理解の場としての役割があるからだと考える。

三つ目は、自己表現ができる役割である。2021年8月29日の活動では、新型コロナウイルスのワクチン接種を義務にするべきか、自由にするべきかについて、海外のニュースをいくつか紹介した後、参加者の意見を聞くという活動を行った。この時はミャンマー参加者から「普段仕事している時は自分の意見をはっきり言えない。今日の活動で自分の意見をはっきり言うことができ嬉しかった」という振り返りがあった。このようにミャンマー参加者が自分の意見をはっきり言うことができた感じることができたのは、VEC日本語活動が自己表現のできる場としての役割も果たしているからだと考える。

4 おわりに

VEC日本語活動には、ファシリテーターの自己成長を育む役割、相互理解・相互学習の役割、自己表現ができる役割があると考察した。前述した通り、VEC日本語活動は、活動を通して自分の意見を自分のことばで伝えること、そして、日本社会で生活するために必要な知識を身につけながら、活動参加者とともに学ぶ活動を行っている。このような活動は、それ自体が社会参加に繋がり、多文化共生の発展に貢献できるのではないだろうか。

今後も、在日外国人との共生が重要視されるなかで、社会参加としての日本語教育を広げることができれば、多文化共生社会の実現に一歩前進できると考える。

(文責：五嶋)

(代表：五嶋友香／秋山萌花 東樹美和 西村愛／

助言者：松尾慎先生)

